

討論がアブドとアムルの間を展開する(P117)

アブド・ブン・アルジュンディーは、アムル・ブン・アルアースが彼にもたらした事の正しさを検討した時、それに対しての議論の扉が開いた。この要求の目的を知り、その行き着く所を理解する為だった。そして言った。

「貴方は何を呼び掛けているのか、即ち貴方はどんなことを望んでいるのか、貴方が、使いの者の肩書をもって要求しているものは何なのか」。アムルが言った。「私が言ったのは、貴方を唯一のアッラーの神へと誘っているのだ、そして貴方が彼以外の者を崇めることは止め、そしてムハンマドが神に仕える者で彼の使徒であることを証言すると言う事で、言い換えると、先ず私が貴方を、神を知る事と神の唯一性へと呼び掛け、神には同列の者は居ないという事、全能で威光あるアッラー以外の全ての崇拝対象を拒む事、それからムハンマドのメッセージを認めるように、と言う事だ」。すると彼、即ちアブドがアムル・ブン・アルアースに言った。「汝は、汝の部族の首長の息子だ、汝の父親、つまりアルアース・ブン・ワイルのことであるが、彼は(かつて)どうしたのか？つまり彼に関しては我々が模範としている者なのだ。その意味するところのことは、汝がクライシュ族の高位の出自である、という事である。何故ならば汝の父親は部族の中で榮譽、名声を無視しない者だ。そして榮譽の人々には、自分達の榮譽を傷つけないで、またその地位の名声を貶めない様な信頼できる言動だけが相応しい。それはあたかも、彼が事を重大であると思っていたかの如くであった。つまりアルアースや彼の同類の人達は、クライシュ族のはみだし者達なのであった。その事は、汝がその為をやって来たこの件について、我々にとって、論拠とならざるを得ないのである。彼、即ちアムル・ブン・アルアースが言っている。「私が言ったのは、父親は死ぬまで、ムハンマドを信じなかった。もし彼が信仰を持ち、ムハンマド(の言葉を)信じていたら、父にはもっと良いことであつたであろう、と彼の為に私は望んでいたのだ。私は、(その時)既に、神が私をイスラームへの導いてくれるまでは、彼の宗教や、彼の意見の如きものに反抗していた。アブドが言った。「汝が彼(ムハンマド)に従うようになったのは何時なのか、父親の死の前なのか、後なのか」。アムルが答えて言った。「直前、(父の死の)直前から彼に従うようになった」。彼(アムル)は言った。彼(アブド)が何処でイスラームに改宗したかと問うたので、ナジャーシイ(アシビニア皇帝*アクスーム王国の王の通称名)の元に居た時と言った。彼にナジャーシイはイスラームに改宗した事を私は彼に伝えた。彼(アムル)は言った。「王に対して彼の部族はどうしたのか」私は言った。「皆が王を認め、従っていた」。彼、即ちアブドは言った。「キリスト教の主教達、即ちキリスト教の首長達や修道士の長が？」「そうです」。即ち同様です、と私は言った。そこでは、彼(アムル)は事を重要視し、その事について彼(アムル)を非難した。彼、即ちアブドが言った。「アムルよ、考慮せよ、即ち貴方の言ったことをよく見てみよ。それは、男の特性として、その男にとってより卑劣なものはない。即ち、嘘を付くよりもっと恥さらしなものはないのである。汝が私に知らせてくれた事は重大な事であり、特にキリスト教徒達にとっては、彼らがアラブの敵対者であることもあり、容易ならざる事で起こり得ないことだ。アムルが言った。「私は言った。嘘は言わなかったし、我々の宗教ではそれ(嘘を付くこと)を法が許す事とは見做していません」。彼、即ちアブドが言った。「私は、ヘラクレイオス(*ビザンツのヘラクレイオス朝610-698又はヘラクレイオス1世610-641)がナジャーシイのイスラーム改宗を知っていたとは思わない。即ち、彼(ナジャーシイ)はヘラクレイオスの指揮下に居た筈で、彼は大皇帝で、ナジャーシイは彼の忠実な配下の人々の最も特別な者の一人であった筈である」。アムルが言った。「私は彼に言った。そのとおり」。即ち彼(アムル)はその事を知っていた。すると彼(アブド)は言った。「アムルよ、どんなことでそれを知ったのか？」彼(アムル)は言った。「私は言った。ナジャーシイ、彼を神が嘉みされんことを、彼は彼(ヘラクレイオス)に地租を払っていたのです。彼はイスラームに改宗し、ムハンマドの言葉を信じた時、彼は次の様に言ったのです。「神に誓って、彼が私に1ディルハムを求めたとしても、私はそれを与えないであろう」。即ち、付与は彼(ヘラクレイオス)の助けになるからである。そしてムスリム達に対してそれ(その金)で不信心者が強くなった時に、不信心者を助けることは正しくない」。彼は言った。「後者(ナジャーシイ)が彼の言葉をヘラクレイオスに伝えたのです。すると彼(ヘラクレイオス)の弟が彼に言った。「貴方に仕えている者が地租を貴方に払わないままにさせ、彼が新しい宗教に従うままにさせるのか」。この事は、彼らの習慣に則った事であった。即ち、彼等は自分達の総督を彼等の奴隷と思っていたので

ある。彼(イマーム)は次の様に言った。「アムルは言った。ヘラクレイオスは宗教に強い関心を持ち、彼は宗教を彼自身の為にした。では私はそれ(宗教)について何をすればよいのか？」

初期のシャリーアでは宗教の自由は一般に知られていた。それについてクルアーンは次の様な言葉で、それについて「宗教に強制はない」と示している。この章句がその例なのである。

ヘラクレイオスが言った。「自分の王権のことを考えなければ、自分は、必ず彼がしたようにしたであろう」。彼の言葉「自分の王権を惜しまなければ」の意味はとは、言い換えれば、今私の手にしているこの王権から離れることを私の心が許さない、ということが無ければ、ナジャーシイがイスラームに改宗した様に自分も改宗した、と言う事である。私は言った。「著名な物語の中で、既にヘラクレイオスのイスラームへの改宗についての言及が記されていたのである。するとアブドがアムルに言った。「嗚呼アムルよ、彼(アブド)は彼(アムル)を非難しながら、汝が言った事を私は検討してみよう。アムルが言った。「私は言った。神に誓って、真実を言った。即ち貴方に真実と実際を言ったのです。アブドが言った。「では、彼(ムハンマド)が命じられ、禁じられたことを知らせてほしい。(アムルが)言った。「私は言った。彼(ムハンマド)は力強く偉大なるアッラーに従うことを命じられ、彼(神)に反抗することを禁じられた」。私は言った。「アブドがこれらの王達の状況を詮索する事を終え、彼等がイスラームを受け入れていること、ムハンマドの命令に従うこと、イスラームを信仰していることについて聞いたことを聴き取りする事を終えた時、この預言者が命じている事と、禁じていることについて説明を求める方へと向かった。(P.119)それは理性が受け入れるものであり、正当なものから出たものか、命じている事に混乱は見られることはないか、であった。(アッラー以外の下にある者は、多くの差異を見出すであろう)

このアブド族の英雄はなんと知性に満ち溢れたことか、なんと諸事の入りと出をよく理解していることか。彼は言っている。「血縁を尊ぶこと、善行を命じており、不正、敵対、姦淫、飲酒、石像・偶像・十字架を拝むことを禁じている」。私は言った。「この短い言葉の中での命令と禁止こそが、イスラームの柱であり、その本質なのである。つまり力強く崇高なるアッラーに従えという命令と彼への不服従の禁止とは、個々の善を含むものことであり、個々の悪に関わらないことであり、同様に善行を成せと言う命令は、種々の服従を包括する名詞であり、不正の禁止と言う彼の言葉は、多かれ少なかれ個々の悪の名詞である。つまり不正とは最後の審判の日の諸悪のことであり、敵対も同様である。即ち服従と善行の存在から逸脱している事は全て、それは口にする事、行う事、その他何であろうと同じ様に敵対である。更に姦淫、飲酒、石像・偶像すなわち彫像、同様に十字架を崇拜することを禁止(について言ったのであった)。これらの諸命令においては、イスラームの精神と本質を含むものであり、神の使徒が神の言葉の統合を与えられ、それを彼に対して短縮して言葉を要約した事は疑いがない。それ故に、彼の諸命令は、この様な表現で発せられ、その命令を受けた者達は、彼からそれ(この命令)を受け取り、それを持って、布教者として、導く人として、それを伝える者として、喜びの伝道者として、警告している人として、全ての人々のところへ出かけて行ったのだ。

アブド・ブン・ジュルンディーがこの命令を聞いたとき、それが彼を喜ばせ、彼はそれを良きものとした。勿論、真理は受け入れられ、(人々の)心に対して影響を有し、たとえ不信心者の言葉になってそれが来たとしても、であった。それ故、アブドが言った。「彼が誘っているこの事はなんと良い事か！ヘラクレイオス(*610-641)もアブ・スフヤーン(*567-653)との話の中で証言している通りだ」。アブドが言った。「もし私の兄が私に従ってくれば、我々がムハンマドを信ずる為、我々は同行しよう。即ち、我々は彼の拠点にいるムハンマドのところに向かい、(P.120)彼の言うことを信用し、向かい会うことが必要になる。そうすれば、その事が我々にとって最大の重要事となり、アッラーの許での最高の評価となるであろう。我々は遠くにおいて、彼(ムハンマド)の使いであるアムル・ブン・アルアースの言葉で彼を信じるのでは十分でない。遠い視線と健全な考えを持つ主人(ムハンマド)の僕(アムル)は何と素晴らしいことか、又倫理の人々の真実を示す倫理の何と素晴らしいことか。

アブドが言った。「しかし兄は私に同意しない」。そして或る伝承では「しかし兄は(王権を)他人任せにし、その家臣、即

ち追従者なることよりも、自分の王権と結び付いた人である」。彼(アムル)は言った。「私が言った。もし彼(兄)が改宗したら、彼の部族に対する王権を、神の使徒は彼に対して手渡すことになるだろう。即ち、この世の諸事に、彼(ムハンマド)は目的が無いということだ。アムル・ブン・アル・アースは、神の使徒の使いであるから、預言者が彼に向い投げ掛けた事全てとは、力強く、偉大なアッラーに従うことであることを知っている。そしてもし彼(アブドの兄)がイスラームに服さなければ、預言者は彼を、異教に執着する者である状態で、王権に着けたままにはしない。つまりアッラーがウンマ(信者達の共同体)に対する主張は、その(ウンマ)の預言者達はその諸王の上にあることであり、諸王達はその臣民達の上にあることである。有名な彼(ムハンマド)に関する種々のハディースにある様に、諸王の安定により、王の神聖さは許容されるのである。指導者達から(自発的に)真理(神)に従うことによって、その他の人々にとっては十分なのである。

(これは)アムル自身の言葉が示している如くである。つまり彼は施しを、豊かな者達から取り、貧しい者へ戻すのである。即ち力強く高貴なるアッラーは富める者達に、貧しい者達為に支出を義務づけているのである。つまり崇高なる彼から、ムスリム間を繋ぐ連結が生じるのである。貧しい者達にとっては、彼等の環境は豊かになり、金持達から彼等に援けが生じるのである。アブドが言った。「このやり方は良いものだ」。私は言った。「どうして良くないことがあるものか、これは天と地の叡智なる者、この叡智を創造した者、ウンマを組織した者、彼への称賛と彼が崇高で有らんこと、つまり神の施策である。彼の事柄は何と偉大なことか、彼の特性は何と高みにあることか！

アブドが言った。「施しとは何か、どんな性質のものか、どの(イスラームでの)裁定ものか？」アムルが言った。「神の使徒が彼の共同体に、種類の違いはあっても、財産における種々の施しの中で、義務付けたことを、彼に知らせた」。彼(アムル)は言った。「私が家畜のことを話した時にアブドが言った。「嗚呼アムルよ、林で飼って、水を飲みに来る我々の放し飼いの家畜を彼(ムハンマド)は取るのか」。即ち(アブドは)、彼の元において、その事を奇妙な事と見做していた。そしてその(家畜の)種類に関しては、それらを(手元にいる家畜を)除いたものは無視していたのだ。と言うのは、(P.121)臣民達に対する諸王の税はこんなやり方ではない方法であると知っていたからであった。そして正にそれは、王達はそのウンマ(共同体)に対して任意に決めた法であるのだ。

アムルが言った。「私が言った。その通り。即ち貴方が否認されたその事を(ムハンマド)は採用されたのです。それは否認された事ではないのです。神は自らすることについては何も問われない。人々が問われるのです。彼、即ちアブドが言った。「神に誓って、私の部族が、彼等の家の遠き事やその人数の多き事が故に、この件に従うとは思えない。即ち彼等は、誰か一人が自分達のお金をこの様に思うが儘に扱う、つまりその(お金の)中から一部を他の国の人に分ける事を重大事と見ているのだ」。

アムル・ブン・アル・アースが言った。「私はジャイファルの館を繰り返し訪れた。その時には、彼の弟が彼に私の情報を既に伝えていた。それから彼は私を呼んだので、彼の居るところへ入った。すると彼の御付きの者達が私の腕、即ち二の腕を取って連れて行った。彼(ジャイファル)が言った。「彼を離せ」。それで私は送り込まれた。即ち私を彼等は解き放ったのである。

彼(アムル)は言った。「私は座ろうとして進んで行った。すると、私が座るままにすることを彼等は拒否したのだった。そして彼等は高慢さを表していた」。彼(アムル)は言った。「それで私は彼の方を見た、即ちその時に。すると彼(ジャイファル)は言った。「用件を話しなさい」。彼(アムル)は言った。「それから私は封をした手紙を手渡した」。すると彼(ジャイファル)は封を開き、最後まで読んで、それを、封をしたまま彼(アムル)に手渡すと彼が最後まで終わるまで読んで、それを彼の弟に手渡すと彼、即ちアブドがそれを読んだ。それからジャイファルが彼の弟(アブド)と議論すると言う方式で議論を展開し、次の様に言った。「クライシュ族がどうしたか、知らせてもらえないか。つまり彼等が、最も力が強く、勢力も伸長させ、饒舌で、それらのことで他の者達よりも特別な者であるが故に」。アムルが言った。「私は言った。宗教を望もうが、剣で打ち負かされ

るのを恐れているが、彼に従ったということです」。正にそれはその立場を統一する驚きの答えであった。この様に指導者達や大物達の使者達はあるべきであった。ジャイファルが言った。「彼、即ち神の使徒と一緒にいるのは誰なのか」。アムルが言った「私は言った。人々は、イスラームに改宗することを望み、他よりもイスラームを選んだ。彼等は、彼等が明らかに迷える者であったと言う事を、神の彼らへの導きで、彼等の理性によって、知ったのであった」。即ちイスラームは、健全な理性における効率的で魅力なそれ(イスラーム)の状態の本質によって、そしてイスラームがそれ(本質)に直面し、人々の主(神)がはっきり説いている力強さと栄誉へとそれ(本質)が導くものによって、人々はそれ(イスラーム)に傾いたのである。

アムルが言った。「この破滅において、貴方以外に残っている人を私は知らない。(P.122)

もし貴方が今日イスラームに改宗せず、それに従わないならば、軍馬が貴方を踏みつけ、貴方の緑(地)を根絶やしにする。イマーム(であるサーリミーが言った)。「即ち貴方の集団のことであり、つまり改宗しろ、ということであり、(貴方が改宗したら)貴方のグループが改宗し、貴方の部族を彼が貴方に任せ、馬も兵士も貴方に向かっていかない。即ち疑いもなく貴方は、ムスリム達との戦いに準備することになる。ムスリム達は、ペルシャの王達、ローマの皇帝達を征服した者達で、貴方の力が彼ら(ムスリム達)より強いわけがない。

この言葉をあの賢いアムル・ブン・アルアースから聞いた時、(この言葉は)彼を震わせ、彼の存在を震撼させたのだった。ことごとこの間の戦争に関しては、アムル・ブン・アルアースが戻る時のこと以外にはないことを知った。彼はアムルに言った。「私にこの一日を私に与えて欲しい。そして明日、私の元に帰って来てくれ。彼(アムル)は言った。「翌日になり、私が彼の元に来た時、彼が私に(入室を)許すことを断った。と言う訳で彼の弟の所へ戻って行った。そこで私が彼に、私は彼の元に至る事が出来なかった、と告げたので、彼は私を彼(兄)の元へ連れて行った」。すると彼(ジャイファル)は言った。「私は貴方が呼び掛けたことについて考えた。つまりもし私が或る男、彼の馬が、嗚呼ここまで(私の元)来られない者だとしても、(その者を)私の手中にあるものに対する王にしたならば、私は最も弱いアラブ人となるだろう。もし彼の馬が来ることになれば、私は(それに)慣れ親しむであろう。つまりこれまでに遭遇した者との戦闘の如きものではない戦闘を見出すことになるだろう」。

アムルが言った。「私が言った。私は明日には出て行く」。彼(ジャイファル)は言った。「つまり彼が私の出発を確かめた時、彼の弟は彼(ジャイファル)を一人で残した。そして朝になって、私のところへ使者を送ってきた。彼(兄)と彼の弟はイスラームに帰依することに応じたのであった。私と喜捨と人々での間での裁定との間での信任と解放によって、私に対して逆らった誰に対しても、私にとって(この事は)助けになった。

アムル・ブン・アルアースの大胆さを見よ。それはジャイファルに言った事が故であるが、彼は(この様に)言った。「私は貴方が私に呼び掛けたことについて考えた。つまりもし私が或る男、彼の馬が私の元、(つまり)ここまで来られない者だとしても、(その者を)私の手中にあるものに対する王にしたならば、私は最も弱いアラブ人となるだろう。もし彼の馬が来ることになれば、私は(戦闘に)慣れ親しむであろう。つまりこれまでに遭遇した者との戦闘の如きものではない戦闘を見出すことになるであろう。」と言った時のことである。

彼(アムル)は彼(ジャイファル)に言った。「今日貴方がイスラームに改宗せず、それに従わなければ、馬が貴方を蹂躪し、貴方の緑(地)、即ち貴方の臣下達を破滅させる」。この事は、極め付きの大胆さである。何故なら彼(王)の臣下達や兵隊達の中において、王座に着いて居る王に対して、そのことを話しているからであった。しかしイスラームの地位は偉大であって、その使者(ムハンマド)は真実、遣わされた者(神の使徒)の範型であり、その使徒が、アラブのアレタイオン(ビザンチンの将軍名)として知られているこの優れ者を選んだのである。

(P.123)事実、アブド・ブン・ジュルンディは神の使徒のイスラームへの伝道者であった。何故ならアブドよりの良い思考によりジャイファルはイスラーム教徒になったからであった。神のテキストに曰く、「彼等の果実から、汝等は彼等が分かる」。既

に幾つかの伝承に次の事が記載されていた。アブドが兄のジャイファルに言った。「彼(ムハンマド)に従え、もしあの男が言われている様に、信用出来るのであれば、私は、従う者の一人になっている。貴方にもその榮譽により(従う事が)出来るだろう。もし彼が嘘付きだったとしても、アラブの人々などが彼に従っている」。この事は人々の中で神により幸運をもたらされた者以外には正しく到達し得ない正当な考えかた方から生じたことである。つまりジャイファルとアブドがイスラームに改宗した時、オマーンの人々が直ちにイスラームに改宗したのであった。そしてイスラームが彼(使徒)の言葉「人々は彼等の王達の宗教の中に居る」を信任し、拡がったのであった。

この故に、使徒はウンマ(共同体)の様々な罪を、指導者に帰していたのである。その理由は、ウンマの人々は当然、指導者に従うものだからである。またアムル・ブン・アルアースとオマーンの人々の王との会話が示しているのは、ウンマがもしイスラームに改宗すると、直ぐにザカート(喜捨)の義務を負うことになり、それは、イスラームが起こって以来、それ(ザカート)に変化が期待されていないものである。それどころか義務は定められたものであり、それは明白である。そしてジャイファルとアブドは人々に対するアムル・ブン・アルアースの支援者であった。そして二人を伴い神の使徒が望んだ望みに達した。つまり(その望みとは)ウンマの人々を永遠に(地獄の)業火の中に居なければならぬ不信心の奈落から救出し、そこからの神の救いを求める事なのである。

イスラームがオマーンで拡がり、そこ(オマーン)の近き所、遠き所(全ての地に)普及した時、アムル・ブン・アルアースは国の統治者となり、彼のイスラームの命令は、この高貴な二人の王の助けにより実施された。(この二人は、イスラームの)呼び掛けの普及とイスラームの精神の拡大において、アムル・ブン・アルアースを助けたのだ。アムルは、マディーナに戻る事に関心を持ち、そして出て行く準備をするまでに、力付ける者、寛大なる者として民の中に留まっていた。つまりこの目的を持って、先人達と後代の者達の主を一掃したのであった。

イマーム(サーリミー)、彼に神が慈悲を垂れ給わんことを、彼が言っている。「(この事は)アムル・ブン・アルアースが、オマーンで神の使徒のその地における総督として、その折にそこ(オマーン)の人々は彼に従う者達であり、彼の言うことを聞く者達であった状況の下で、滞在した後、神の使徒の死去が彼(アムル)伝わり、マディーナへ帰ることを決めるまでのことであった」。(P123 最終行)